

主よ、来たりませ

コリントの信徒への手紙Ⅰ一六章15〜24節

私パウロが、自分の手で挨拶を記します。主を愛さない者は、呪われよ。主よ、来たりませ。(21、22)

口述筆記をしてもらってきたパウロが、手紙の最後に自筆で書き記しました。その最後の挨拶は、「主よ、来たりませ」でした。口語訳では、「マラナ・タ」というユダヤ人の日常会話の言葉であるアラム語がそのまま記されています。普通、挨拶というのは、こうあって欲しいという願いが言葉になります。ユダヤ人の日常の挨拶は、「シャローム(あなたに神の平安がありますように)」でしたが、初代教会のキリスト者は、お互いの間で「マラナ・タ」と挨拶を交わしたようです。彼らの願い、希望は、「主イエスはまもなく再び来てくださる」ということでした。この言葉は、単なる言葉だけの挨拶ではなく、彼らの生き生きとした希望の表れだったのです。私たちも主イエスの再臨を待ち望みつつ、「主よ、来たりませ」と祈り願う心を大切にしたいものです。